中外新聞 外篇 十七

慶應義塾藏書

定價一匁

特
西垣文庫
文庫10
7328
17

特 文庫10
7328
17

宮城文庫

中外新聞外篇卷之十七

慶應四年五月

徳川監察津田の真道歎願書

誠恐誠惶頓首〻〻謹て
大總督府參謀閣下に奉上書い伏て惟れば我　神州
天祖天照皇神の神勅に依り
神祖天日高彦火瓊〻杵尊日向国高千穂宮に降臨座し
皇祖神武天皇都を大和国橿原に奠めたまひし後栂木の彌
継〻に安国と平らけく　天津日継の高御座知し看す事天
壌と共に窮極なき御寶祚卑賤の私共今更奉称讃いも恐多

西園文庫

き俄に奉存い然るに千万歳の久しき運に否泰ありて時に通塞無之事能もて蓋是気化自然の流行りて歳に寒暑日に昼夜なるが如くある俄に可有之哉と奉存い然る処陽に神器を覬覦し公然として憚らざる梟逆佐穂彦将門の輩も踵を旋さずして忽ち天誅に伏しいへ共陰に術数を用ひ遂に大権を攘み奢侈栄輿に過る藤我氏の如き藤原氏の如き其罪佐穂彦将門に十倍仕りい事と奉存い処蘇我氏を幸ひまして

天智の聖主在し速に誅戮を加へさせ給ひ藤原氏の如きい其跋扈更に蘇我氏に越えられと雖も歳月を経て既に久しく且其族蔓延甚しく

宇多

後三条等英邁の君まし〳〵られと雖も又之を奈何ともし難き事能もてりき於是乎　皇天手を平清盛に假て始めて相家藤原氏の大権を收められり然りと雖も武門の横暴更に甚しく降りて足利氏の季に至りて壊乱実に極まり天下復天皇皇帝の尊きを知る者なく　皇運の否塞茲に極まりい俄に奉存い時に當徳川家の先祖贈東照宮家康新田氏の支族にて三河国に起り風に櫛けづり雨に浴し織豊二氏に継ぎ乱を撥い正に反し上　皇運の陵夷を扶け下蒼生の塗炭

を救ひ天下をして復
天皇皇帝陛下寶祚の尊き実を
天照大御神以来連綿たる　天津日継の高位座ある事を知
らしめ以後二百六十餘年海内粛静の治を致したる事其功
業莫大なるを因りて二荒山に宮廟を建　東照宮の神號を
贈せられ尊くも皇親一品親王をして世々其祭典を掌らし
めたまふ爾来我神州政権の徳川家に帰したまひ　東照宮
當時誠に止むを得ざる形勢と其時情とに従ひて假に　至
尊に代り天下の為に大政を執られたるに昉まりは俊と
其間実に一毫の私なる事なく其證を　東照宮の遺訓に天

下と天下の為めの天下、国と国の国、家と家の家、と十事を屢
々諭されたるに明らかなる事なれば豈彼の陰に術数を
用ひ大権を攘ふ蘇我氏藤原氏の比あらんや豈頼朝の巧
に王権を奪ひ義時の陪臣を以て國命を執りし類あらんや
然るを況や足利氏の反逆を以て天下を乱りしと豈同日の
論あらんや嗚呼如何ぞ昌平二百餘年の久しき因習俗を
成しいなしら　東照宮の遺訓を忘れ政刑當を失ふ事少か
らざる　松相成ヤ夫天無二日地無二王我国鎌倉以還の
形勢恰も国に二主なるが如く人二頭なるが如く国体宜し
きを得ざりしことのあり然る処水戸贈大納言光国并斉昭両

人の功によりて天下万民皆　尊王の道を辨へ且近来外国交際の道日に開け西洋の文学東方の名教と和し世界の学問漸く合し今将に一とならんとす此時に當て人に二頭ありて如き不都合なる国体をして永く我神州に存せしむべからん即是王政復古の秋来るあり元と我老寡君慶喜徳川氏相續の後日あらざして祖先以来継承の政権を朝廷に還奉り将軍職を辞退致されしを無他猶此大義を立て存さんが故にして全く　皇國の真君たる天皇皇帝陛下を尊奉し我が神州をして唯一王の國と成し列藩侯伯と同心協力廣く天下の公議を尽し　皇國不朽の

基本を立て其政律を確定し固て以て方今の海外強国と駢立せんと企望致されしる俄に有之是先祖　東照宮の不能止形勢に従ひ一時假に摂政し大政を返上致されし訳にて即二百餘年の前　東照宮其始を成し二百餘年の後我老寡君其終りを致されしるとやへし嗚呼国の為めに家を忘れ天下の為めに身を忘られしる一片の丹心磯貴島の大倭心遠く之を歴史に覧むるに千古其比倫を見ず唯上古天孫降臨の日獨大国主神遯国の美事殆将に同日の談しるべきのみあり然れども宜しく非常の天恩顕賞を可仰蒙の処其儀更に無此座其後大坂より

上京可仕途中前驅の者共於伏見薩广少將家来の者と行違ひ戦争差起りに至り右い全く同人家来共計有之由にて奏聞の上誅戮可仕旨従臣共頻に申立い処より忽ち此私鬪に及ひい儀にて奉對
朝廷佐穂彦或を將門に如き野心を挾みい私の儀に毛頭無之事判然天下衆人共に知る所にて今更私共辯論申上い迄い無此度い然る延先驅の私戦不利にして却て不測の奉觸天怒恐懼亟極速に坂城を開て東帰仕い次才に至りい但此時猶従臣等の前議を持守し敗走の者共を軍律に處し固く城守仕い上何時迄も君側の奸を除くを主張仕天下諸侯

の兵を徵求いたす戦の勝敗人心の向背未と如何を知るべうらざる我に奉存い然るを老寡君速に城を開き断然東帰仕いも一旦朝敵の汚名を蒙いても平生の素心尊　王の丹心悉く皆水泡消滅仕らんと深く恐懼仕いで故に偖又東帰仕い後も関東鄙野の家来共唯　東照宮以来の旧恩のみを承知仕徳川にのみを知て
天朝にのを知らざる輩比く皆是に由座い故或を云ふ東兵直に西上して遥に承久の故智を襲んと或を云ふ暫く之を駿遠の間に遯り軍艦を以て直に其巣穴を衝んと議論頗る紛然死を以て老寡君を犯を者極て少うらざい此時に方り

老寡君若〳〵諸臣の言を聽き東北諸侯を連合して
王師に抗するに至りいたぐ事亦知難きん非ざる儀欤と奉
存ぜ然ともとも老寡君平生の素心尊王の誠意確乎不拔只管
恭順の道を守り百方鎮静向に力を尽し　王師に抗する者
を直に双を我が身に推に同しとさへ存ぜ候ては程なく右ハ
我ら老寡君我ら神州闔国の乱離因て以て増長せん事を恐
まられ又外敵の其隙に乘ぜん事を患ひられ窃に蘭相如
の趙國を憂ふる心を体認致ぜ儀なく辛ふじて紛〻なる
議論を鎮め江城を開き軍艦銃砲を差上け穏に水戸へ引退
き愈恭順恪謹〳〵伏〳〵て被奉待

天裁ぜ儀に付座ぜ偖又四月五日　勅使ぜ下渡の五箇条中
に奉欺
天朝犯　皇都錦旗に発砲〳〵并叛謀云〻の文字有之ぜ右の
数文字を全く寃罪の儀と奉存ぜに付家臣共一同此数文字
有之ぜ下ぜ請ぜ成百度段種〻苦諫争論仕ぜ得共老寡君
他日訴寃の日を可有之の旨堅く被ぜ下ぜ請ぜ仕ぜ
其苦心焦慮如此に付座ぜ抑老寡君勤　王の赤心果して天
地を貫ぜに非ざ徳川家鄙野頑陋譜代の士民共迚も坂城
退去仕百数ぜ甲駿の府城も速に開城仕間敷ぜ況や巣窟さ
る江城を開き軍艦銃砲を差上ぜに於てをや右の趣

天鑒昭明に亮察し成下は故欵格別の
叡慮を以て徳川家名相續の俊亀之助へ仰付一同難有
仕合と奉存候然る上は老寡君報国尽忠の情実更又に洞
察し成下非常の
天恩を以て還住の上幼稚の亀之助後見し仰付はゞ鄙
野頑陋数万の士民折合宜敷と勿論て老寡君慶喜と於て
も再生の
天恩如何計り徹骨銘肝仕殊更と可抽忠勤俊と奉存候微賤
の陪臣冒瀆尊威恐惶不少奉存候へとも甘んして斧鉞の刑
を犯し奉献言の条可然哉成し仰上可し下は誠恐誠惶

頓首謹言

徳川亀之助家来
津田真一郎真道

辰閏四月

諭言一則

去来山人

江戸人を鬼角田舎人と見るゝが常と卑賤なるの癖なり尤戒
むべき事なり西洋紀元前六百年の頃スレジヤといふ用け
ざる国とアナカルシスといへる賢人なりしが其頃開化文
明の国なるギリシヤ国の一愚官国自慢してスレジヤ国の
夷風なる事を笑ひ剰へアナカルシスをも誹る事なりしと

其時彼徐々ゝ咎へて云ふ汝ダ言実ゝ理ありて予ゝ閉口せざるを得ず汝ら国を又汝の如きものの在るにとりて恥る事あるべしんやと嗚呼従来政府の吏稍もすれば諸藩士を見る事尊大なる悪弊ありて是亦怨怒を引の一端とあるべし後来尤も慎ざるべからず